

★突然アフガンにやって来て何もできない

# パキスタン・アフガン医療奮闘戦記

## 中村哲吾氏

NGO「ペシャワール会」現地代表 医師  
なかむら・てつ 1946年生まれ

私たちは、アフガンのジャララバードで水源確保の仕事もしています。現地からの報告では、テロに関係のない村が爆撃を受け、百人単位の死者が出ています。アメリカ国務省の発表とはずいぶん違っているのです。

ペシャワールでは、空爆以前から国連関係や外国のNGO（非政府組織）の人たちが街をうろろして、避難民がアフガンから押し寄せてくるのを待

ち受けていました。空爆前なので、アフガンに直接食糧を供給できるのだから、なぜしないのか不思議で、まるでアフガンの人々が難民化するのを期待しているかのようで、不快さと不気味さを感じたものです。

ペシャワールから毎日連絡が入る。PMS病院では、朝八時に職員の朝礼が行なわれ、午後三時の診療の終わり

まで、いつも通りに運営されている。アフガンのカブールの診療所でも、診療はいつもと変わりがないという。

退去を勧告されて、日本に一時帰国した時には状況が読めなかったので、重症の患者さんだけ診療を続けるようにと指示を出した。しかし、それも通常の診療に戻した。医療に関する限り、いつもと全く変わりなく運営できている。ただし、問題は食料である。

アフガンでは、都市から田舎のほうへと住民の疎開が始まっている。たとえばジャララバードでは、住民の六割が田舎に移動した。一方でバザール（市場）は、まだ六割ほどが営業している。カブールに至っては、全部開いているという。

最も緊急を要するのは、食糧の供給である。二〇〇〇年春から未曾有の大干ばつにさらされているアフガンでは、飢餓に直面する者四百万人、餓死線上にある者百万人といわれた（WHOの昨年6月発表）。今年もこの数字は増

えこそすれ、減ることはないだろう。それに空爆が追い打ちをかける形だ。

私たちは、まず食糧を供給しなければ餓死者を出してしまうと考えて、「カブール飢餓対策計画」を立てた。そのため基金を募集するため日本に「アフガン いのちの基金」で募金活動を始めた。

食糧配給は、現地住民の長老たちの集まりであるシルガの協力なくしてはなし得ない。シルガはアフガンの最小の権力単位でもあり、アフガニスタンを動かしているのは、実はこのシルガである。タリバンも、シルガの支持がなければ何もできない。私たちが自由自在に動けるのもシルガの支持を得ているからである。私たちは、カブール飢餓対策計画をシルガに提案し、歓迎された。

食糧の買い付けは当初、カブールで行なう予定だったが、食糧価格を高騰させる恐れがあるとの警告があり、ペシャワールでの調達となった。食糧配



給計画は当初「百万都市カブールから一人の餓死者も出さない」というものであった。しかし、状況が変わった。ジャララバード周辺爆撃の罹災者も対象にすることにした。配給の割合をカブールに八割、ジャララバード周辺に二割と変更したのだ。

私たちは、とにかく急いだ。私用とはいいながら、日本に戻ってから食糧配給の手配、アフガンの窮状を訴える講演、マスコミからの取材など息つく暇もない毎日。その間もアフガンの状況が気になる。

今日十月十七日、ペシャワールで第一次配給一万ドル分の食糧の買い付けが終わった。明日十八日、ペシャワールカブールにトラック数十台分の食糧を運ぶ。二千四百家族の三カ月分である。来週早々には配給できる手筈を整えた。食糧は小麦とローガンという油の二種類だけである。ローガンは日本の味噌や醤油のようなもので、ローガンがなくてはこの地域の食事は成り立たない。たった二つの食材であるが、これが肝腎なのだ。

日本での募金は順調に集まっている。今日現在で三千万円の募金を頂いた。

だが食糧の配給はまだまだ不足している。政治、民族、宗教、言葉などに関わりなく医療活動を行なうのが私たちの使命である。今は医療以前の、生命を維持するための食糧の確保が必要なのだ。さらに二次、三次と供給を続けなければならぬ。(10月17日)

大干ばつによる食糧と水の不足。それに米軍による空爆と地上戦の展開。瀕死の褐色の大地に暮らす人々に、これ以上酷いことがあるでしょうか。

千本の井戸掘りを目指した活動は、今年の八月には作業地が六百十三カ所になり、そのうち利用可能な水源は五百五十二カ所です。ところが、空爆が予定を狂わせてしまいました。すでに着手したところでは井戸掘りを再開しましたが、当初の予定は遅れざるを得ません。現地スタッフは食糧配給の応援に回っています。

※

十月二十五日現在、アフガニスタンの各地で誤爆や治安の悪化が伝えられてきた。しかし、日本にいる私にはペ

アフガニスタンの詳しい状況はよく分

からない。

ペシャワールからカブール、ジャララバードに向けて食糧輸送の十七トン積みみのトラック十九台が出発した。小麦が十七台と食用油・ローガンが二台に積載された。

国境では食糧だけは、両国とも問題なく通行できるようである。ただ米軍による空爆が移動する車両にも及ぶとのことで、それが心配である。

十月二十三日、ペシャワールから連絡が入った。カブールにトラック三台が到着した。カブールでは大喜びをしているとのことだ。スタッフの声も弾んでいる。また、ジャララバードにも食糧は到着した。すでにペシャワールでは第二次の食糧買い付けが始まっていた。日本での基金は三千数百万円に上っている。冬が来る前にできるだけ食糧を買い付けて配給したい。

空爆と冬の到来で、カブールから南の暖かい方へ、相当数の住民が移動するだろう。臨機応変の対応が必要だ。配給の中心をカブールからジャララバードに移す必要が出てきている。

それと別に、ジャララバードの周辺の村で空爆によって約百七十名の死傷

者が出た。まずそこに第一陣の食糧を配給する。

二〇〇〇年の春から、ユーラシア大陸は最大級の干ばつにさらされている。パキスタン西部、アフガニスタン全土が干ばつの被害下にある。

ようやく手に入る水は不潔で、赤痢など伝染病の温床である。農業にまで水は回らない。昨年、私は水源確保のためのプロジェクトをスタートさせた。「病気は後でなんとかするから、生きてほしい」という気持ちだった。

水源地の確保はどうしても必要である。日本人スタッフは、ペシャワールで活動を頑張っ続けてきている。着手した六百数十カ所の井戸などの水資源は作業の継続と保全を維持している。ただ、食糧配給のために、現在の現地スタッフ七十四名のうち、三十名がジャララバードに、二十名がカブールへと臨時に配置変えしている。しかし配給が終わり次第、現場に復帰してもらおう。

十月二十九日にペシャワールに戻る。ことになった。半月ごとに日本とパキスタンを往來することになりそうである。(10月25日)【この原稿は『徳洲新聞』用に書かれたものです】